The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 志賀重昂『日本風景論』における剽窃と引用 : 国粋主義と西洋を志向する近代化の葛藤 |
| Author(s) | 山田, 志歩 |
| Citation | 若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 71-74 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/91187 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 志賀重昂『日本風景論』における剽窃と引用

## ―国粋主義と西洋を志向する近代化の葛藤―

テクスト環境論　博士前期課程 1 年
山田　志歩

1.　はじめに

志賀重昂(1863-1927)は、三宅雪嶺らと共に政教社を立ち上げた国粋主義者として知られる。自身の南洋巡航の体験を著した『南洋時事』(1887)では、西洋の推し進める帝国主義、植民地主義的侵略への危機感を力強く述べた。政教社の機関誌『日本人』では、1888 年の創刊号から 3 号に渡り国粋保存を論じ、当時の表層的な欧化政策を批判し、固有の長所である国粋を養うことによる日本の近代化を主張している[1]。

日清戦争の最中に発表された『日本風景論』(1894)[2]は、志賀が札幌農学校にて得た地理学の見識を存分に発揮した著作である。気候や地形の変化に富む日本の風景、特に「跌宕」と志賀が述べる雄大な自然風景を称賛する論が、西洋の崇高の概念を導入したものとして先進的だと言われる。そして「跌宕」の中でも富士山などの火山に志賀が日本の独自性を見出し、国粋の基礎としたと捉える研究が一般的だ[3]。また、本書では火山に登ることが奨励され、近代登山の幕開けの書とも評価される。だが、登山に関する記述の核心である「登山の気風を興作すべし」の章は、内容の多くが Galton, F.の *The Art of Travel* [4]からの剽窃だと黒岩(1979)が指摘している[5]。黒岩は、この章は本論ではなく附録であり、志賀にとって重要性が低い故に剽窃を行ったと結論付ける。また、米地(1999 他)は「日本には火山岩が多々なる事」の章における個々の火山の紹介箇所にて、Milne, J.の論文 The volcanoes of Japan[6]からの剽窃が度々行われていると述べる[7]。米地は、剽窃をしてまで火山を説明したのは火山の少ない清への優越感と敵愾心を国民に持たせるためだとまとめる。だが、『日本風景論』が全体として引用の多い著作であることを踏まえ、登山の記述と火山の紹介という 2 つの剽窃箇所に目を向けると、剽窃には別の理由が見えてくる。本発表では、西洋に倣った近代化の必要と西洋への対抗意識の葛藤という本書に通底する問題との関わりから、剽窃の動機を再考したい。

---

1 『明治文学全集 37』(1980、筑摩書房)pp.97-105。「日本前途の國是は「國粋保存旨義」に撰定せざるべからず」他を参照。
2 本発表では、岩波文庫版の志賀重昂(1995)『日本風景論』(1,7,15 版をもとに近藤信行が校訂)を使用。
3 内田芳明(2001)『風景の発見』朝日新聞社、大室幹夫(2003)『志賀重昂『日本風景論』精読』岩波書店、浜下昌宏(2004)「志賀重昂『日本風景論』にみる日本的崇高の可能性 「跌宕」山岳景仰と国粋」『文芸学研究』(8)pp.1-25 など。
4 本発表では、Galton, F. (1872), *The Art of Travel* (5th edition), London: John Murray. を使用。初版は 1855 年である。
5 黒岩健(1979)『登山の黎明「日本風景論」の謎を追って―』ぺりかん社
6 Milne, J. (1886), The volcanoes of Japan. *Transactions of the Seismological Society of Japan*, 9(2)pp.1-184
7 米地文夫(1999)「北日本の火山に関する志賀重昂『日本風景論』の記載―剽窃とその背景としての政治的意図―」『総合政策』1(4)pp.477-488、同(2004a)「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心―中部日本の火山等に関する記載をめぐって―」『総合政策』5(2)pp.349-367、同(2004b)「志賀重昂『日本風景論』における皇天・后土論―西南日本の火山記載と台湾補記をめぐって―」『総合政策』5(3)pp.371-389

2.　剽窃に見られる西洋への対抗―Galton の登山術―

本書にて豊富に行われる引用は、主に日本の古代の和歌や近世の紀行文からなされている。これらは、日本には優れた風景が溢れており、また日本人には風景を評価する思想が備わっているという論を裏付けるものと言えよう。加えて訪日外国人の著作からの引用も複数ある。その内容といえば日本の火山風景を称賛するものがほとんどであり[8]、志賀は引用によって西洋人から見ても優れた風景が日本にあることを示し、西洋に対する優位性を明らかにするのである。火山風景は志賀の言う「跌宕」、つまり雄大な自然風景である。志賀は火山について、頂上に立つことで天上から下界を手中に収めたように高邁な精神が得られると述べる[9]。浜下(2004)がこの論と西洋の崇高の概念の類似を論じた通り[10]、「跌宕」の風景の賛美は崇高美に通ずるものである。志賀は「跌宕」に並べて「瀟洒」、「美」として日本の花鳥風月、繊細優美な風景を挙げてはいるが、西洋的な崇高に当てはまらないこれらはさほど重視されない[11]。志賀が「跌宕」によって対抗する相手が西洋であることは明らかだろう。

さて、剽窃について、「登山の気風を興作すべし」の章での登山術の解説箇所を確認したい。そもそも志賀自身の登山経験は豊富とは言えず[12]、実践的な登山術を語るならば誰かの論を借りる必要があった。しかし、当時の日本において登山は一般的に親しまれるものではなく[13]、体系的な指南書があるはずもない。一方の西洋では既に登山は広く楽しまれるものであり、例えばイギリスでは 1857 年に英国山岳会が組織され、世界各地で精力的に登山を行っている。登山術の発達は、日本と西洋で歴然の差があったということだ。よって志賀は情報源を西洋の書籍に求め、*The Art of Travel* の論を借りたのである。剽窃は実践的な登山術の解説箇所にて行われるのだが、一例として「山中、氷雪の上を歩行する際の準備及び注意」を取り上げよう[14]。Galton は“Snow Mountains.”の見出しのもと“The real dangers of the high Alps (…)”[15]とアルプスでの雪中登山を説くが、志賀は「越後の連岳間、立山山彙の間、信濃、飛驒の群嶺間、北海道の山中に入れば(…)」とアルプスを日本の山岳に置き換え、あくまで日本の山岳を舞台とした登山を想定している。また、Galton が同頁で箇条書きにて“1. Yielding of snow-bridges over crevices.　2. Slipping on slopes of ice.　3. The fall of ice, or rocks, from above.”と淡々と雪山の危険性を並べるのに対し、志賀は「時にあるいは脚を積氷雪の上より踏み外づして深渓に陥ることあり、また地上に堅く堆積せる氷雪なりと想

---

8 志賀(1995)p.96、pp.174-175 など。
9 志賀(1995)p.203
10 浜下(2004)p.9。崇高とは、荒々しい自然風景に相対し畏敬及び高揚感を得るという美的体験を指す。(同 pp.2-3)
11 『日本風景論』の約 5 割以上の頁数を「跌宕」とされる火山に関する論が占める。本書の実質的な主題は「跌宕」であると言ってよいだろう。
12 志賀の登山歴は三田博雄(1973)『山の思想史』岩波書店 pp.44-53 に詳しい。
13 宮家(2004)によれば、信仰目的での登山は縄文時代から存在すると言われるが、宗教者以外の禁足の戒律が存在するなど一般の人は山岳から遠ざけられた(宮家準(2004)『霊山と日本人』日本放送出版協会 p.67)。近世には富士講など庶民による登拝も行われるが、山岳の神聖性は失われず登山を楽しむというものではない(同 p.222)。なお、非信仰目的の登山者の団体である日本山岳会は 1905 年の結成である。
14 志賀(1995)pp.251-253
15 Galton(1872)p.47

ひこれを踏むや、輙ち氷雪の崩堕して、俱に共に断崖上より落つることあり」[16]と、自身の文才を活かし幾分劇的とも言える文に変え、登山の臨場感を持たせ語っていく。

総じて登山術に関する剽窃箇所では、Galton の文章の直訳をそのまま掲載することはなく、上記の例に見られるような志賀による書き換えが行われている。これは、*The Art of Travel* のような旅行者向けの実用書ではなく、国民全体に向けた啓蒙書を発表するのだという志賀の意志が反映されている。剽窃箇所では力強い文体で登山を語り、「跌宕」つまりは崇高を伝えようとする[17]。また、日本に先んじて西洋にて発達した山岳を探検調査し踏破する行為は、西洋諸国による征服、領土拡大の姿を縮小したものとも言えよう。当時は既に西洋人が日本の数々の火山に登頂していた[18]。『南洋時事』に見られるように西洋による侵略に警鐘を鳴らす志賀には、西洋での登山の発展及び日本の火山での西洋人の登山は国土の征服を暗示する脅威であった。志賀は、西洋人の日本での登山活動を見過ごす日本人に対する警告の意味を込め、情熱的な文章で登山術を語り近代的な登山のあり方を広めようとする。その際、西洋に倣って近代化を目指す劣った日本の姿を曝け出すことがないよう、Galton の名を隠し通すのである。

## 3.　火山への固執と近代化の欲求―Milne の火山紹介―

志賀は「跌宕」として火山を掲げ、西洋の火山との比較によってその独自性と優位性を示している[19]。そして火山の中でも富士山を繰り返し称賛し、日本各地の富士山に形状が類似した火山を「〇〇富士」と紹介することで国粋としての富士山、火山を知らしめようとする[20]。日本が台湾、中国に進出した暁にはそれぞれ玉山を台湾富士、泰山を山東富士と改名するべきだと述べており、対外膨張の思想も色濃く表れている。前田(2006)は志賀が国威伸張のシンボルとして富士山を扱っているとして、日清戦争期に出版された『日本風景論』が内包するナショナリズムを指摘している[21]。志賀は、火山を国粋として広め国民の愛国心を養おうとしていると言えよう。

志賀は「日本には火山岩の多々なる事」の章にて日本の火山を地域ごとに 200 以上列挙し、各火山について注目すべき特徴の説明を必ず一言以上添える[22]。挿絵も充実しており、日本の火山が「美妙なる円錐形」であることを称賛し「名山」とする論[23]を視覚的にも説明する。これらの説明のいくつかが Milne の論文からの剽窃であると米地(1999 他 2 件)が指摘する。剽窃箇所の原文と志賀の文を確認すると、例えば Milne が “before us there was a view which was as striking as it was unexpected”と述べた箇

---

16 志賀(1995)p.252
17 大室(2003)は志賀の力強い漢文調の文体自体が「跌宕」であると述べる(大室(2003)p.245)。
18 外国人による登山記録は山崎(1969)pp.131-140 に詳しい。江戸時代末期の 1860 年のイギリス公使オールコックに始まり、数々の西洋人が富士山、立山など全国各地の火山を登っている。
19 志賀(1995)pp.190-191
20 志賀(1995)pp.319-320
21 前田愛(2006)『幻景の明治』岩波書店　より「志賀重昂と日露戦争」pp.205-223
22 志賀(1995)pp.98-173
23 志賀(1995)p.92

所は、志賀によって「図らざりき人は眼前に峭絶なる懸崖を看自からその上に立ち居ることを」とされている[24]。このように Galton の登山術の剽窃箇所と同様、劇的な文体に変えられていると分かる。勇壮な火山に登り得られる崇高の体験を実感させるものとなっているのである。考察すべきは、志賀が 200 以上の火山全てに説明を付するといういわば暴挙に出た理由だろう。仮に志賀が登山経験豊富であったとしても、全国の火山の知識を網羅することは到底できず、自身の知識だけでの説明は不可能だ。無理にでも膨大な数の火山を説明したのは、富士山に代表される火山の美という質的な特長に加え、圧倒的な火山の数という量的な面からも日本が火山国たる根拠を示そうとしたからだという米地(1999)の論は納得できるが、それが清に対する優位性を説くためだと結論付けている点には疑問が残る[25]。確かに『日本風景論』は日清戦争期の著作であるが、台湾や清の火山を「〇〇富士」に組み込むことを当然のように想定する志賀にとって、清に対する日本の優位性は改めて説くまでもないことに思われる。むしろ、本書で繰り返し比較されるのは西洋であり、剽窃によって名が消されるのも西洋人である。実は、Milne の同論文からは“peerless Fuji”として富士山を称賛する一節が、Milne の名を出して英語のまま引用されている[26]。Milne の名を消して剽窃した箇所は、Galton の著作の剽窃箇所と同様、西洋に比べ劣る日本の姿が露呈しそうな場面なのである。志賀は西洋を敵視し日本の優位性を懸命に裏付け、火山を掲げて対抗していると言えよう。

志賀は火山を称賛し登山を奨励することで、国民が火山を「跌宕」つまり西洋近代的な崇高の枠組みによって再発見し理解することを望む[27]。ただし志賀は、Galton や Milne の論の剽窃箇所と同じく、崇高の概念を西洋のものとして表立って紹介することはない。西洋に学ぶ日本の姿を巧妙に隠して火山を国粋に据えた近代化を目指すのである。「跌宕」、つまりは崇高であるところの火山風景の価値を保証するのが、それと比べられる西洋の風景であるというジレンマまでも読者には隠されるのである。

## 4. おわりに

本発表では、国粋主義者である志賀重昂の『日本風景論』内の西洋書からの剽窃と引用を手がかりに、表立った西洋の模倣を避けようとしつつも、西洋の知識や技術を盗むしか近代化の方法がないことを切実に理解している志賀の葛藤を論じた。明らかな剽窃が指摘されている登山術や火山紹介の記述だけに西洋の模倣があるのではない。志賀が国粋と標榜し西洋への対抗手段として掲げる雄大な火山風景自体も、西洋近代的な自然観、崇高美という枠組みに落とし込まれるものである。日本における風景観の近代化は、それが西洋に先導されていることを秘匿した状態で進められたのである。

---

24 志賀(1995)p.160。Milne(1886)pp.29-30 が対応箇所である。Milne は阿蘇山外輪頂上に実際に登ってこれを記した。
25 米地(1999)p.485
26 志賀(1995)p.96。Milne(1886)p.57 が対応箇所である。Milne が褒める富士山の“solitary grandeur”は「跌宕」に通ずる。
27 一般的に、志賀は崇高の概念の他、水蒸気や雲の動きへ着目し風景を変化するものとして見るといった西洋近代的な風景観を、Ruskin, J. *Modern Painters* (1843-1860)から得たとされる(内田(2001)など参照)。同時代にも内村鑑三が『日本風景論』の書評にて Ruskin との類似を指摘したが、志賀がそれを認めることはなかった。本書にて志賀は Ruskin の名を出しておらず、ここからも西洋の模倣を明らかにすることを避ける様子が窺える。